

参加者からご意見をいただきました

森口委員（京都市西部障害者地域生活支援センター所長）

支援センターは、障害のある方の生活上の困りごとをお聞きし一緒にその解決策を考えていく、相談支援といわれる福祉サービスの事業所です。ご相談者の共通点として、相談相手が身近におらず孤立しておられ、家での居心地が悪くなってしまい本当であれば仲良くしたいご家族やご近所さんにひどい思いをさせてしまう、そんな状況をどうしたらいいのかと、ご相談が寄せられます。

ご報告では、Aさんのチャレンジはもちろんですが、関係された皆さんも素敵な動きをしておられると感じました。

民生委員さんは、日頃からAさんやそのご家族の生活ぶりに関心を持ち続けておられ、その思いをAさんに伝わるように関係を作っておられたと思います。また、困りごとをお聞きした際も、抱え込んでしまうのではなく、専門機関につながれたことが、一番大事な点だと思います。そして、つないだ後も寄り添い続けておられます。

あんしん支援員は、障害手帳が取得できるかもしれない、取得によって生活がよりよくなるかもしれない、との専門的な見立てをされました。

相談支援専門員は、Aさんの望みをしっかり聞いて、Aさんのニーズに合った事業所を紹介された。これも専門的な見立てです。

就労支援事業所は、障害のある方にとっての仕事は社会参加であり居場所であるという視点、Aさんの得意なことを活かせる仕事を見つけるチャレンジの機会と一緒に取り組むなど、しっかりAさんのことを見ておられると思いました。

障害のある方のご支援をさせていただくにあたって、基本となるのはご本人のお話をしっかり聞くということです。その前提として、ご本人の気持ちを理解できるように努める、そのあたたかい気持ちをご本人に分かるように伝えることが大事だと思います。ご報告では、それらのことを、それぞれの立場で実践されていたと思います。自立とは、何でも一人でできることではない、頼りの先を増やすことだと思います。



まとめ

右京区社会福祉協議会・永田事務局長

あんしん支援員の活動では、なかなか片付けられない方にお会いすることが多く、要るものと要らないものの判断が人によって違うことがあるため、それにうまく寄り添って促していきます。大切にしていたものを捨てられた経験があったら、怒りや拒否につながる場合も多いです。

全国的に子ども食堂などを支援している湯浅誠氏は、制度とは、家族や親せき、近隣、友人、自治活動などの人間関係に基づく「助けあい」がある程度機能していることを前提としており、その「助け合い」が少しずつ無くなってきているので、無縁社会とか、制度の狭間の問題などが出てきているのではないかとおっしゃっています。あんしん支援員もこの制度の狭間の問題から制度につながるためのワーカーとして配置されています。

ご報告の前半はサービスの受け手としてのAさん、後半は担い手としてのAさんのお話だったと考えると、本日のテーマである「地域共生社会」、「ともに支え合う地域」に近づくのではないかと思います。

単純にサービスを受け取るだけでなく、今度は活動の担い手となり得ることもある、ということです。サービスの受け手から担い手への転換です。

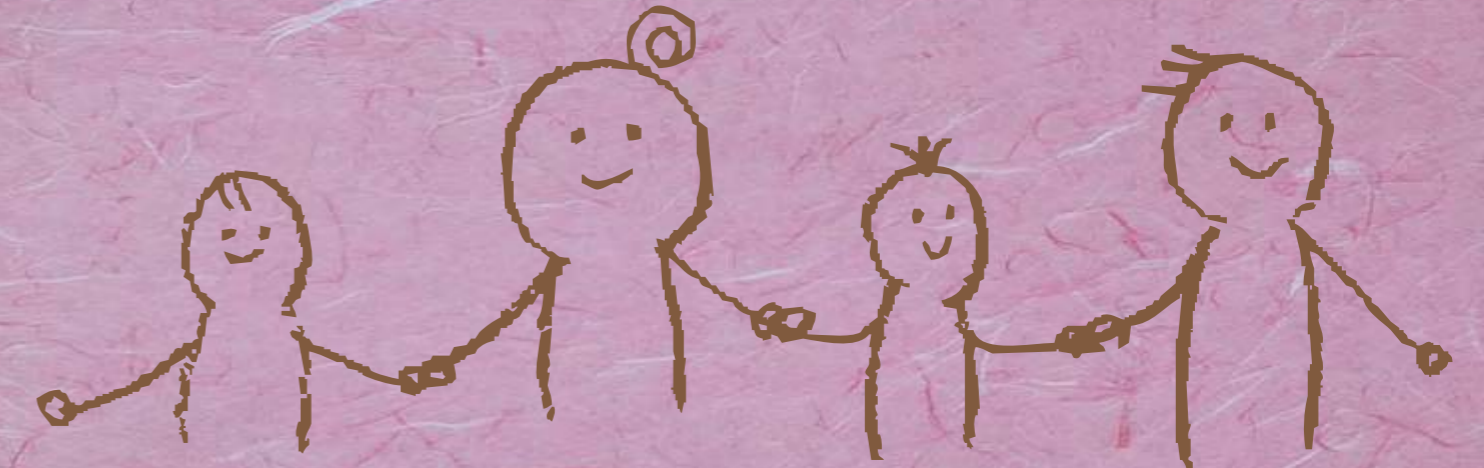
地域活動であっても同じで、最初は嫌だったけれど、徐々に主体的に動き出せるようになっていたり、やってみてよかったと思うことがある。人に何かをやってもらうだけではなく、自分もしていく。役割を持つことで受け手から担い手に転換していく。そういったことをこれからも大事にしていき、役割を持ってもらうための知恵やアイデアを積み重ねていくことが、ともに支え合う地域につながっていくのではないかと、少し住みやすい右京区になるのかと思います。

右京区内の学区社協でも、地域にある障害の方が通われる施設と上手く連携しておられる例があります。当事者同士の活動を支える取組や、地域でお祭りなどをされる際に、就労支援事業所をお呼びしてブースを出してもらうことがあります。そういう事例を拝見すると地域で支えられているな、と感じます。そういった気持ちが、施設に通う当事者の方にも当然伝わりますし、地域で支え合う、ということがどういうことか掴んでいけるのではないかと考えています。



アクティブネット通信

令和4年3月 右京区地域福祉推進委員会 発行



ともに支え合う地域福祉活動に向けて

私たちが暮らす地域では、災害の頻発や人口減少社会の到来、世帯構成の変化などにより生活課題が多様化、複雑化してきており、いわゆる社会的孤立の問題がクローズアップされてきています。また、新型コロナウイルス感染症のまん延の影響により、それらの生活課題はより深刻化しています。同時に私たちが身近な地域で取り組んできた、地域福祉の様々な活動も、休止や縮小を余儀なくされており、皆様も悩ましさをお抱えのことと思います。右京区地域福祉推進委員会では「ともに支え合う地域福祉活動にむけて」をテーマに皆様と一緒に学びあう機会を持ちたいと思い、令和3年9月に「第33回右京福祉のまちづくり学校」の開催を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、やむなく中止と致しました。今回の通信では、その後に規模を縮小して開催した学習会の内容を紙面にてご紹介しております。これからも「ともに支え合う地域」について考えていければと思います。

右京区地域福祉推進委員会 委員長 高屋宏章

地域あんしん支援員とは

地域あんしん支援員は、地域社会とつながりがなくなる「社会的孤立」の状態にあり、福祉的な支援が必要であるにも関わらず、支援につながっていない方等へ寄り添いながら、関係機関や地域の皆様と連携し福祉的な支援に結びつける取組を行っています。

支援を行ううえで課題を6つに整理していますが、複数の課題を抱えておられる方がほとんどで、40～60歳台ではごみ堆積、65歳以上で医療拒否の方が多く傾向ですが、共通していることは、社会的に孤立していることにより支援につながりにくい状況にある、ということなのです。

地域あんしん支援員は、独自の施策を持っているわけではないので、ご本人との関係づくりを丁寧に行い、またご本人の気持ちやペースを大切に、時間をかけて粘り強くご本人の困りごとの解決に向けて働きかけをしています。

Aさんとの出会いは、室内に物が多く生活スペースが狭くなっており、支援が必要な状況だということから民生委員から区役所に相談があったことがきっかけです。Aさんに関わる中で、大きく2つの困りごとがあることがわかってきました。1つ目は室内を片付けたい気持ちはあるが必要なものと不必要なものの仕分けが難しいこと、2つ目は働きたいという気持ちは持っていたがうまく就労に結びつかず長年働けてなかったことです。



ともに支え合う地域福祉づくりに向けて

令和3年11月29日、京都市右京ふれあい文化会館において、「ともに支え合う地域福祉づくりにむけて」をテーマに、右京区地域福祉推進委員を対象に学習会を行いました。学習会では、地域あんしん支援員設置事業で出会ったAさんとAさんに関わる方々が、Aさんへの支援を通じての展開やAさんのお気持ちなどをご報告いただき、参加者とも意見交換を行いました。今回は、紙面になりますが、その学習会の概要をお伝えいたします。

民生委員との出会い

あんしん支援員 支援のきっかけとして、民生委員さんがAさんにお声掛けをされましたが、声をかけられた時、Aさんはどう思われましたか？

Aさん 民生委員さんには、母が入院した時から気にかけてもらっていて、母の病気のことや家の片付けの話をするうち、民生委員さんが「手伝ってあげる」と言ってくれたので、片付けることになりました。

民生委員 Aさんのお母さんがデイサービスを利用されていて、それがきっかけで話をして家の中の状況を知りました。何か支援が必要だと思いました。まず区役所に相談し、その紹介であんしん支援員に関わってもらうことになりました。一緒に片付けをしたり、ごみの日の声掛けをしたりしました。片付けていくうちにAさんも以前よりいきいきしているように感じてきました。顔を合わせると、片付けのことや仕事のことなど話しくださるようになり、嬉しく感じています。

あんしん支援員 訪問を重ね、Aさんと一緒に室内の整理に取り組んでいます。必要なものもたくさんあるので、少しずつ、時間をかけて片付けを行いました。その中で、片付けが苦手なこと、仕事をしたいがなかなか結び付かなかったことなどを話してくださいました。



相談支援専門員との関わり

あんしん支援員 次に、障害福祉サービスの利用ができる可能性があったので、障害者手帳を取得し、障害福祉サービスの利用に向けて、相談支援専門員に関わってもらうことにしました。

相談支援専門員 相談支援専門員とは、高齢者の支援で言うケアマネジャーとだけ思えばよいと思います。乳幼児期から高齢期の障害者を対象に相談支援を行います。17歳以下は障害児相談支援、18～64歳は指定特定相談、65歳以上は介護保険と分かれています。相談者の悩みや希望を聞いたり、これからの暮らしの計画を立てたり、必要なサービスにつなぐ等を行っています。Aさんとは、家の片付けをどうしていくか、どんな仕事がしたいかなど、一緒に考えてプランを立てていきました。その後も継続的に悩みがないかとか、今の仕事はどうかなど、Aさんや就労支援事業所からお聞きしています。Aさんは、自宅での手伝いをしたことがあり接客業や飲食関係の仕事がよいかと思いましたので、就労支援事業所を紹介し見学に行ってもらいました。

Aさん 見学に行った時には、いろんなものがある楽しい所だなと思いました。

相談支援専門員 Aさんはパンフレット見た時から「これにする」と乗り気でした。見学の時にはいつから通所できるかを伝えておられ、すぐに気に入ってもらえたようでした。その他にも、最近では、コロナワクチンの接種についてどうしたらいいかとかいう相談を受けていて、一緒に考えていけたらと思っています。

Aさん 困ったことがあると相談できるので、とても安心しています。



就労支援事業所での仕事

あんしん支援員 次に、就労支援事業所に通うようになるのですが、Aさんは実家のお蕎麦屋さんを手伝った経験があったので、事業所の仕事はすごく身近に感じて、できるなという風に思った、と聞きました。

就労支援事業所 就労継続支援B型事業所は、障害者総合支援法に基づき、障害のある方の日中活動、主に就労を続けていくことができるよう支援することを目的としています。A型とB型があり、B型の特徴としては、障害のある方がその人の状況に応じて働く場所、仕事をこなしながら能力を高めていく職業訓練の場所、自分の力が発揮される社会参加の場所であり、自分の居場所として機能しています。本事業所では、レストランや菓子・パンの製造販売など飲食を中心とした事業を

して、Aさんも見学に来られた時は、体験の時に一通りの仕事をやってもらい、すぐに通所することを決められました。お蕎麦屋さんで働いた経験もあるということで、今はレストランのホール係を担当してくれています。働き始めて半年になりますが、自分のペースで働くことができおられます。また、Aさんは、笑顔が素敵でみんなが和やかになります。コミュニケーションをとる力があたりだと感じています。これからもこの調子で頑張ってもらいたいと思います。

Aさん 仕事を始めてからは事業所の仲間と話を楽しくしています。仕事をしていなかった時は家でテレビを観ていることが多かったです。今はとても楽しいです。配達に車で行くことやいろんな景色とか地名とか覚えたりするのが楽しいです。



地域での活躍

あんしん支援員 今年は町内会の組長が回ってくる年ということで、今は組長を引き受けて役割を果たしておられますが、一度はお断りされたとお聞きしました。

Aさん 民生委員さんが「私もフォローするから」と言っていただいたので、それやったら私もできると思って引き受けました。

民生委員 「順番回ってくるけど私には無理やし断ろうと思っている」と相談を受けたのですが、少しサポートしたらできるんじゃないかと思いました。また、地域の一員として組長の役割を果たすことができれば、Aさんの自信にもつながると思って勧めました。今では自分でできることが多く、先日の町内清掃でも組長としての役割をきっちりこなされていました。よかったなと思っています。

